

交野の里の森村は 昔はむくね村と呼ばれてた  
丘の上の古墳郡に守られて ほんに長閑な村やった  
郷土史カルタに「八幡の神主 村の名に」とあるように  
千年頃にここに住み私財を投じ村をあんじょうして下さった  
石清水八幡宮の神官様の御名を戴き森と名付けたのやそんな  
これだけでも森の村人がどれほど儀に厚いか分るやろう

その森村では昔から

「森男に私市女」と今も言う

森の男は働き者で優しゆうて 私市女は情が深い  
こんな二人が所帯を持てば ほんに立派な夫婦ができる

世は安土桃山時代 村の城戸に 若い夫婦が住んでいた  
由松とお種の二人 惚れおうて近頃所帯を持ったばかり  
夜になっても別れずに 朝になったらお早うと言える  
共に暮らせる嬉しさに二人は一緒に良う働いた  
森男の由松は優しいし 私市女のお種さんは良う尽くす  
思い思われ夜が更ける 人もうらやむおしどり夫婦

所が今は安土桃山時代 大和の国の郡山で筒井様が築城中  
ある日 村の庄屋様がお見えになつて

「なあ由松よ 大和郡山から郡代様のご命令が届いてな  
郡山城築城のご普請に手伝い人足をこの森からも何人か  
出さねばならん

御奉公期間は三月 みつき 長ても四月 よつき と言う事や

お前も行ってくれへんか」

と頼まれた いやとも言えず由松は膝に置いたごぶしを  
ぎゅつと握り締めながら

おろおろと青くなつてお種を見つめ

「へえ 庄屋様のお頼みや お断りは出来まへん 参ります  
と答えたのだった

「三月か四月の事らしい お種さんちよつとの間の辛抱や  
我慢しておくれ お前の亭主だけやない」

そういつて庄屋様は帰られた

「いやや いやや あんたと一日でも分かれるなんて

堪えられへん 行かんといて 此処にいて」

泣いてすぐるお種さん

「俺もいやや 別れとない いつもお前と一緒にいたい

郡山などに行きとない」

由松も泣きながらお種を抱いてこう言うた

「せやけど 郡代様のご命令や そむけば庄屋様の立場がない

辛いけど 不義理は出来ん 行くしかないわ」

どんなに嘆いてあがいても瞬く間に日が過ぎて出立の日になった  
選ばれた男衆が 案内役に連れられて大和郡山へと向かう

村はずれの燈籠の辻まで 家族みんなが見送りに出る その中に  
目を真つ赤に泣きはらしたお種さんがいる

「お種 達者でな 三月なんかすぐ経つし 我慢して待つてておくれ」  
お種さん 物も言えずに頷くばかり

やがて南の方角に旅支度の男達の姿が消えた 由松も消えた

足元が崩れた 皆が帰つてもお種さんは帰れない

その日から お種さんは何にもできぬ

今頃どうしていることか

怪我などしてやしないかな

虐められていないかな

何をしてても手につかぬ

夜は夜とて泣きながら枕を抱いて泣き寝入り

朝は朝とて目を腫らし由松恋しと雀に語る

やがて長い三月が経つて 人足に行つた若衆が

一人二人と帰つてきた 喜んでお種さん

亭主の噂を聞きに行く

所がみんなは夫々に違う普請場で働かされて

連絡すらも取れなんだからしい

由松は城の石垣普請場だと噂で聞いた

一度 石垣が崩れ怪我人死人が出たと言う

それが誰かは分からないという事だった

庄屋さんに聞いてもわからない

この時代 百姓の命は軽いもの

郡代からの知らせもない

気がきやないお種さん 雨の日も風の日も 毎日毎日

今か今かと燈籠の辻の大燈籠の傍に立ち 背伸びしながら

郡山からの帰り道 南の道を見つめてた

朝も昼も夕方も あんた恋し早よ帰れ

どうか生きて無事で帰れと手を合わし

他の若衆は無事帰り家族と共に暮らしてる

ひよっとして良い人見つけてそっちに行つた

いえいえ そんなことはない

「我慢して待つてておくれ」と言つた声を思い出し

心は千々に乱れつつ 夏の炎天下 吹雪の中も

今か今か もしやもしやと やせ細り

食事も喉を通らなく ただただ

あんな恋しい早よ帰って と待っている

村人が気の毒がって慰めてもただ泣くばかり

大きな黒い瞳に人を恋する純な清い光を秘めて

情の深いお種さん

燈籠のねきで立ち尽くし南の方を見つめつつ

まだかまだかと待っている やせ衰えて待っている

もう家に帰る力すら無くて 燈籠の辻にうずくまり

そのまま石になつたとか

帰れ帰れの願いが叶い 蛙の形になつたとか

今じゃきつと由松の魂も共に入ってる

「今帰ったよ 待たせたね」と二人一緒に岩の中

石になつて恋貫いた 森男と私市女